

序

一頃、よく国際化が問題にされたが、国際的 (international) とは元来、国籍 (nationality) を捨象して初めて成り立つ概念であろう。しかし、一般に日本で国際化と言う場合、せいぜい他国人との交流とか、他国に対して門戸を開くと言った意味あいで行われることが多く、基本的に自国意識が先行しているようである。ところが最近、本来の国際化に近い概念としてグローバリゼーションという言葉がよく使われるようになった。全世界的、全地球的規模で物事を考える事を意味するのだろう。

こうした広範な視野で対処すべき問題に地球環境問題がある。しかし、これが単に地域や国に留まらず世界的、地球的規模の重要な問題である事は理解できても、それに対してどのようにアプローチできるか、個人レベルからはなかなか分かりにくいのが現状である。要するに人間にとって快適な環境を創り出して行くためには、限られた資源の、限られた空間である地球をどのように維持するかと言う問題である。自然の被造物である生物は、その恵みによって、あまねく生を謳歌してきたのであるが、禁断の実を食べて知る事を覚えた人間だけが自然を篡奪し、今その借越を問われているのが地球環境問題と言ってもよい。生物が自然を享受するには、それなりの節度や倫理のある事を人間はもう一度考え直さねばならない時機に来ているという事であろう。

人間は、自然の洞窟を利用して身を守る事から始まり、より快適な環境を求めて生活空間を次第に拡大させ、今やそれを地球規模で考えねばならなくなって来たと言う事である。そこで改めて問題になるのが人間にとって適正な尺度すなわちヒューマン・スケールとは何かと言う事である。これは人間の寸法感覚に合っている事を言うのであろうが、単に人体寸法だけを問題にしているわけではない。例えば人間の能力によって認識できる範囲の事象は理解できても、人間にない能力によってはじめて認識できるようなものは実在感に乏しい。要するに、ヒューマン・スケールとはある事象をどれだけ違和感なく受け入れられるかによって異なるものと考えてよからう。従って、今後の研究にとって必要な事は、こうしたヒューマン・スケールをどのように、しかもどれだけグローバルな視点で捉えられるかと言う事であり、これが国際化の大切な所以でもあろう。

1989年10月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦